

1. あこがれの山桜に会いに

■ はじめに

渡邊さんより「山桜も見頃」との情報があり、別途報告される「第17回大野川河川シンポジウム」への参加も兼ねて、年度末の忙しい時期でしたが、何とか都合が付けられた8名(内現地集合2名)が山桜の確認(花見?)へと向かうこととなりました。

共助研メンバーは、山桜調査はしたものの開花した長谷の山桜は未だ一度も見ていません。「なにとなく春になりぬと聞く日より 心にかかるみ吉野の山」とは、西行の山桜を詠んだ和歌の一つですが、“み吉野の山”を“長谷の山”に置き換えれば、約800年前の“和歌の達人に似た我々の心境でした”と言え、気取り過ぎでしょうか？

波木事務局長、矢ヶ部会員、森脇会員、木寺に加え、新会員の武市さんと武市さんの友人の小川さんを加えた6名は、前日の19時30分に三重町のホテルに着き、事前打ち合わせを兼ねた懇親会を行いました。毎回、楽し過ぎるほどの懇親会ですが、女性お二方の存在により、この夜は、いつもとは一味違った楽しくも華やかな懇親会となりました。

シンポジウムの報告は別途されますので、以下には、山桜見学部分に焦点を当てて報告致します。懇親会に参加できず、翌日合流されたお二人は、赤星副会長と波多野会員です。

■ 圧倒された奥の院の山桜群

“奥の院”とは、我々が勝手に名付けた名称で、調査地点として渡邊さんから最初に案内頂いた場所です。柴北川の支流の一つの栗ヶ畑川沿いの道路を登った箇所にあります。言葉を尽くすよりもどうぞ写真を見てください(以下すべて森脇会員撮影の写真)。

写真-1が調査済み(20本)の箇所です。その斜面の続きには未だ多くの山桜があることは分かっていましたが、開花した状況には皆感動しました(写真-2)。

長谷山桜の素晴らしさをご自分で確認したいという方には、まずはこの奥の院の山桜群をお薦め致します。渡邊さんから最初に案内して頂いた意味が改めて分かりました。



写真-1 奥の院その1



写真-2 奥の院その2

■ 本命の松巖寺裏

松巖寺裏の桜群は、楽しむための視点場の整備も行った場所で、我々が最も楽しみにしていた場所です。調査済みの本数は77本ですが、調査できなかった大きな桜も多く残されています。写真-3が視点場からの全体の眺めです。写真-4は、集中している箇所のアップです。今後、竹林対策等を行えば、やはりこの場所が、長谷山桜の本命地点になるのではと思われました。

視点場から眺めた後、松巖寺の敷地沿いにある散策路まで行き、近い場所からも観察もしましたが、やはり視点場からの全体の眺めが一番良いということが分かりました。しかし、蛍の時期は、この散策路からは蛍の乱舞が楽しめるということです。



写真-3 松巖寺裏全景



写真-4 松巖寺裏アップ

■ 全景把握の展望台より

三ノ岳なかよしパークへ向かう道の中途にある展望台付近からは、長谷地区が一望できます。桜が咲いていない時期でも大変良い眺めが楽しめますが、開花時期の様子はどんな風でしょうか？

Here it is ! (手前の杉林の向こうに見える家屋が松巖寺です)



写真-5 松巖寺裏を含むパノラマ

■ 未だ見ぬ花を尋ねて

西行は、こんな歌も残しています。

「吉野山去年の枝折の道かえて まだ見ぬ方の花を尋ねむ」

“去年目印として小枝を折っていたが、道を変えて新たな花をさがそう”ということを歌っているそうです(西澤美仁：西行 魂の旅路、角川ソフィア文庫参照)。

展望台に登った3人は(森協会員、波多野会員、木寺)、未だ知らなかった「一際目立つ山桜群」があることを発見しました。波多野会員の適切な位置判読により、どうやらその場所は、松巖寺裏山の林道に入る谷付近という目星が付きまして。いつもの探検心に火が着いた3人は、いざその場所確認へと展望台を下り、谷筋へ向かいました。



写真-6 新発見の山桜ポイントを眺める

案の定というか、直ぐ近くまで来てみると手前の木々に邪魔されて、「目立っていた一群」が十分見えません。その状況が写真-6 で、山の頂上付近にうっすらと見えているのがその一群かと思われれます。

しかし、思いがけない出会いもありました。写真を撮っていると、一人の年輩の女性にお会いしました。「桜を見に福岡から来ました」と言うと、「この道沿いの桜は私が植えたんよ！私も天気が良いんで散歩に出たところさ」と行って歩いて行かれました。山には「山桜」、道沿いには「年配の女性が植えたソメイヨシノ」、別世界に迷い込んだような気持ちになりました（写真-7 参照）。

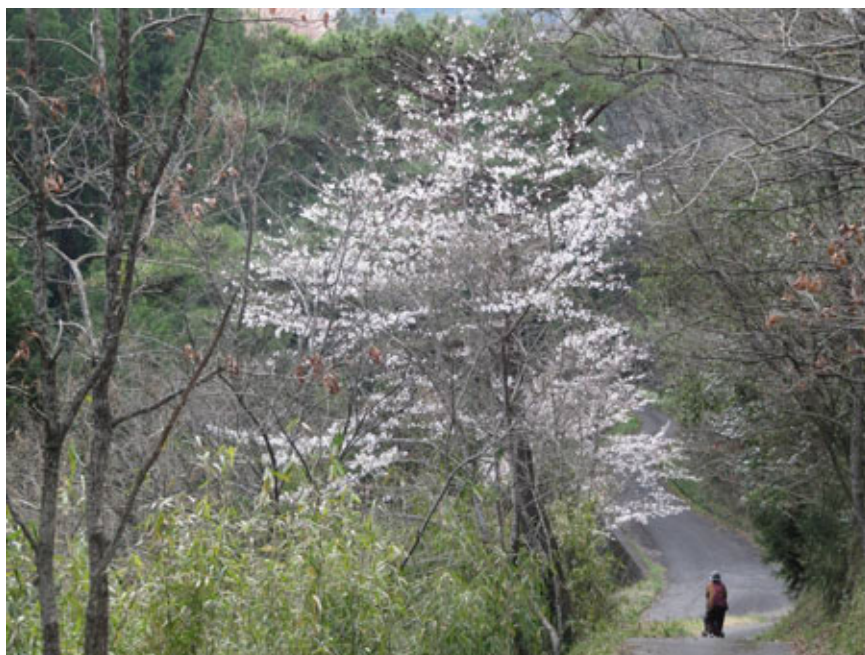


写真-7 自分が植えた桜と年配の女性

■ さいごに

その後も、我々3人は時間の許す限り、周辺の探訪を続け、新たな地点もたくさん見つけました。詳しく紹介できず残念ですが、落合地区の鉄塔下の山桜は大木で樹形も扇形をしており見事でした。鳴瀬谷付近では新たな視点場候補地も見つけました。また、天満宮から柴北川右岸斜面を見た場所にも「一際目立つ山桜群」があることを確認しました。

付け焼き刃の知識で恐縮ですが、西行と言えば、山桜と月をこよなく愛した歌人として有名で、やはりその代表作は、

「願はくは花のしたにて春死なむ その如月の望月のころ」でしょう。

“できれば、桜の花のしたで死にたい。お釈迦様が入滅された二月十五日、満月の光を浴びた満開の桜を見ながら”。西行は、ほぼこの歌のとおり、文治6年(1190年)2月16日に入寂したとされています（上記図書参照）。

未だ「死ぬ場所や時期を考える」には早すぎる我々ですが、山桜や月という自然の美しさを讃え、その気持ちを和歌として残した我々の先達の心持ちと日頃の自分を、おこがましくも比べて見れば、現代の我々が見失いがちの“なにものか”が、中山間地域と呼ばれている地域には多く残されており、都会と呼ばれる場所に暮らしている我々にとっても大切なもので後世に残していくべきものではと考えさせられました。

個人的感傷が入った報告となり恐縮ですが、最後まで読んで頂いてありがとうございます。こういう機会を与えて頂いた、「柴北川を愛する会」の皆様をはじめとした長谷地区の皆様、幸野さんに改めて感謝申し上げます。

「柴北川プロジェクト」は新年度も継続しそうな気配を見せています。（以上 文責：木寺）

2. 河川シンポジウム：柴北川からの発信

■ 柴北川散策にかけつけて、阿蘇神社で豚汁を馳走に

2日目の28日は、山桜の見学とあわせて、大野川流域ネットワーク・大野川流域懇談会による「第17回大野川河川シンポジウム」にも参加させていただきました。

当日は、午前中に、柴北川下流の石橋「神宿橋」を起点として、川を上流に辿っていく柴北川散策が企画されていました。平素は、県道沿いの風景と山桜ばかりに目が行っていたメンバーも、改めて柴北川の美しさを確認できると意気込んで、集合場所の「神宿橋」に約束の10分前に到着したところ、・・・・・・参加者の姿が一人も見当たらない。あれれ、早く着つきすぎたかな、と逡巡しているところに、県の河川課の方々もお子様連れで到着し、「確かに、この場所、この時間で間違いないはずだけど。」との弁。どうもおかしい、ということで「愛する会」の渡邊さんに連絡したところ、なんと、散策の一行は既に「神宿橋」を出発して次の場所へ移動しているとのこと。これまで長谷に10回近く通った我々でも、長谷での時間の流れ方が伸縮自在であることに改めて気付かされ、急いで、次の「大聖禅寺」に向かいました。

(のちほど、このタイムラグは、案内役の某「愛する会」会長さんのご判断により発生したことが判明。某会長さん曰く、「朝から体調が思わしくなく、頭がボーッとしてしまっただけです、会長さん。細かな時間にとらわれない臨機応変さが、長谷の良さですから」)

「大聖禅寺」では、ボケ封じのご利益があるといわれる観音様に一同合掌した後、寺前の平地が長谷で最も広い平地であること、戦国時代にはこの地で大規模な戦いが行われ、その戦死者を弔う石塔のお墓が後世の農地整理時に多く出土したこと、などの話を聞かせていただきました。

この後、武市会員と小川さんを散策部隊に残して、メンバー一同は山桜視察に出発し、12時過ぎに、黒松阿蘇神社(この日特別に、青年団による神楽が披露されました)に戻ってきました。例によって、柴北川レディースの方々も前夜から仕込んで準備されたおにぎりとお飯で握ったおにぎりと、これも長谷産(おそらく)の猪肉を煮込んだ豚汁(?)、さらに山盛りの漬物を、ご馳走になりました。



柴北川散策(大聖禅寺)



豚汁(猪汁)の昼食(黒松阿蘇神社)

■ 長谷探検隊が大活躍の河川シンポジウム

いつもながらの美味しいもてなしで大満足のメンバー一行は、長谷小学校体育館に移動。既に閉校式を終えた小学校では、様々な学校器材や道具が運び出されたと聞きましたが、このシンポジウム開催のために体育館はかつてのままで、地元の方々をはじめとして100名を超える人々で賑わう様子は、長谷地域の生活拠点としての姿をそのままに留めていました。

13時に、長谷探検隊隊長の二宮里桜(りお)さんの司会進行で、シンポジウムが始まりました。開会あいさつでは、シンポジウム実行委員会委員長の大家会長に



シンポジウムの様子(小学校体育館)

より、「地域がさびれつつあります。地域づくりについて、活発な意見交換をしましょう。」と高らかにシンポジウムの開会が宣言され、続いて川野先生（流域懇談会会長）、西副所長（国土交通省大分河川国道事務所）、村岡防災調整監（大分県）、玉田県議のごあいさつ、橋本市長、佐々木会長（流域ネットワーク）のメッセージ披露と続きました。ごあいさつでは、皆さんが異口同音に、「ふるさとの良さ、桜満開の美しさ」を讃えておられました。

今回のシンポジウムの目的のひとつは柴北川プロジェクトの紹介でしたが、それ以上に実行委員会が力を注いだのが、長谷探検隊をはじめとする若人達によるふるさとづくりの報告とシンポジウムの運営でした。

先ず、13時半から約40分、「愛する会」の渡邊事務局長と当会の波木によるリレー講演で、「花いっぱいふる里づくり事業」がパワーポイントで紹介されました。会場で聴講されている多くの住民の方には、自分たちのふるさとで展開されている事業の進行に、少し驚きながらも感心の面持ちで聞き入って戴いたように思います。

大人たちの活動報告に続いて、長谷探検隊による「栗ヶ畑城探検」報告と、今後の活動予定が発表されました。地域づくりの胎動が、自分たちの身近なところから、それも中学生達の活動により始まっていることを知って、多くの方々のふるさとづくりに対する関心がさらに高まったのではないのでしょうか。

続いて披露されたのが、地元黒松地区に古くから伝承されている「黒松供養盆踊り」。毎年旧盆に奉納される盆踊り唄（地元では「口説き」と呼ぶそうです）は7曲あるそうですが、そのなかから「振平さん」「段七」の2曲を、二人の口説き手の高らかな歌声にのせて、約20名の地区の方々により踊って見せていただきました。うち1曲は、踊り手が三人一組となって剣に見立てた棒で演武するという、盆踊りとしては大変勇ましい踊りで、長谷地区に蓄積されている歴史の深さを改めて感じさせていただきました。

休憩をはさんで、後半のトップが、大野川沿い各地の「こどもかっぱくらぶ」の皆さんによる、「私たちの夢」と銘打ったパネルディスカッション。進行役の河童さん（幸野さん）による各地の河童伝説の紹介から入り、パネラー6人が日頃の川遊び体験等を通して感じている川づくりや地域づくりの夢を、1時間近くにわたり語ってくれました。大勢の聴衆の前でも物おじせず、しっかりとひとりひとりの考えを語ってくれる姿に、学校生活以外に地域の様々な活動に係わっている子ども達のたくましさを感じました。

最後に、大分県の森田主任による「河川管理者研修会報告」、及び国土交通省の八坂係長による河川環境学習を通しての「子供の成長に関するアンケート結果報告」が行われ、3時間に及ぶシンポジウムの幕が下りました。

閉会あいさつで壇上に立った長谷探検隊のメンバーの、大きな仕事をやり終えた後のさわやかな笑顔が忘れられません。長谷探検隊の皆さん、そしてこの日まで準備に大わらわだった渡邊さん・幸野さん・懇談会の皆さん、大変お疲れさまでした。心に残るシンポジウムでした。（以上 文責：波木）



二宮里桜さんによる司会



黒松地区の皆さんによる供養盆踊り



子ども達によるディスカッション